

考慮する必要がある。

(福尾正彦)

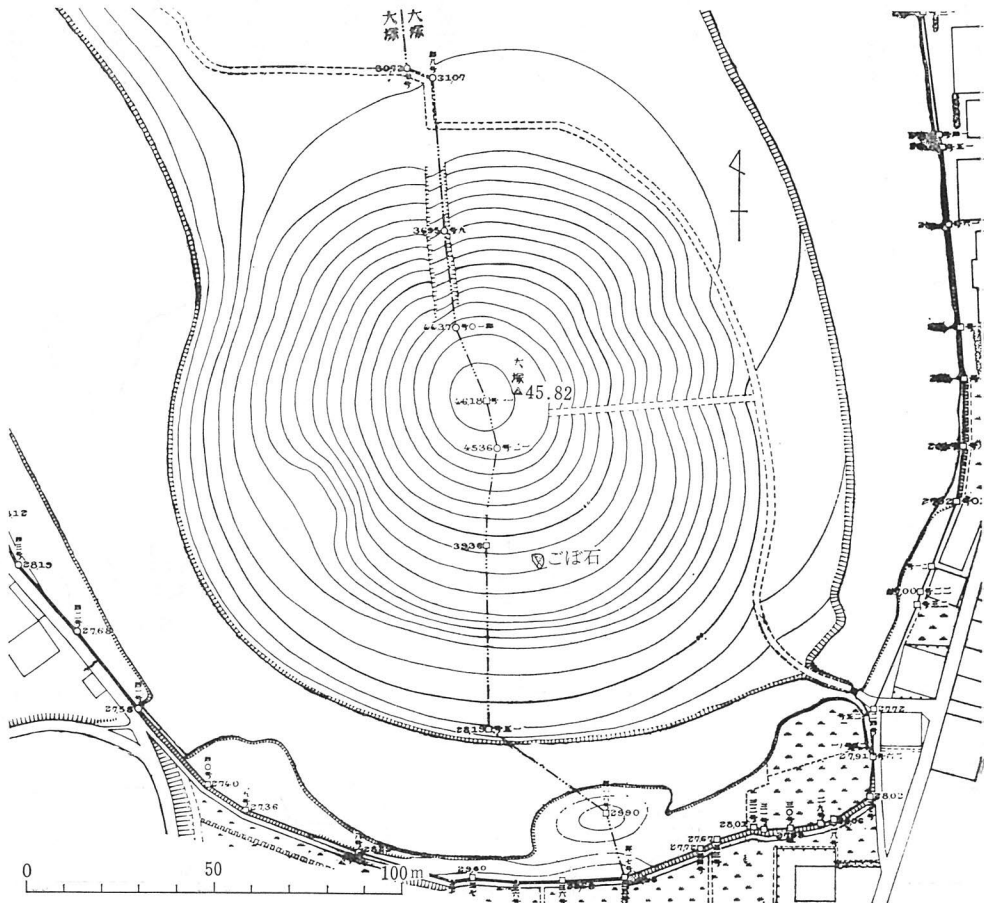
註

- (1) 宋永雅雄『日本の古墳』朝日新聞社 一九六一年
- (2) 上野竹次郎『山陵』山陵崇敬会 一九二五年

河内大塚陵墓参考地の墳丘調査

古市古墳群の中心からやや西に偏して、河内大塚陵墓参考地は位置する。全長は三〇〇メートルをはるかに越える前方後円墳で、主軸を羽曳野市と松原市のほぼ境界沿い、つまり南北方向にすえている。本墳の後円部には、「ごぼ石」、「牛石」、「亀石」などと称される巨石(以下、ごぼ石と称す)が一個露出していることがよく知られていた⁽¹⁾。この石の正確な所在地点、性格等に関する知見を得るために、十一月二十三日から二十六日にわたって調査を実施した。

ごぼ石は墳丘のほぼ主軸上、標高三八メートル〜三九メートルのところに、長軸を北西から南東方向に据え、位置する(第10図)。その周辺は、径一三・五〜一四・八メートルにわたり、摺鉢状にくぼんでおり、ごぼ石はその中心的位置に置かれている。主軸に沿って摺鉢状の



第10図 大塚陵墓参考地調査箇所的位置 (1/2000)

くぼみの肩の部分結び、旧墳丘面を復元すると、ごぼ石の頂部とこの旧墳丘面との高さの差は、約二メートルとなる（図版六2）。

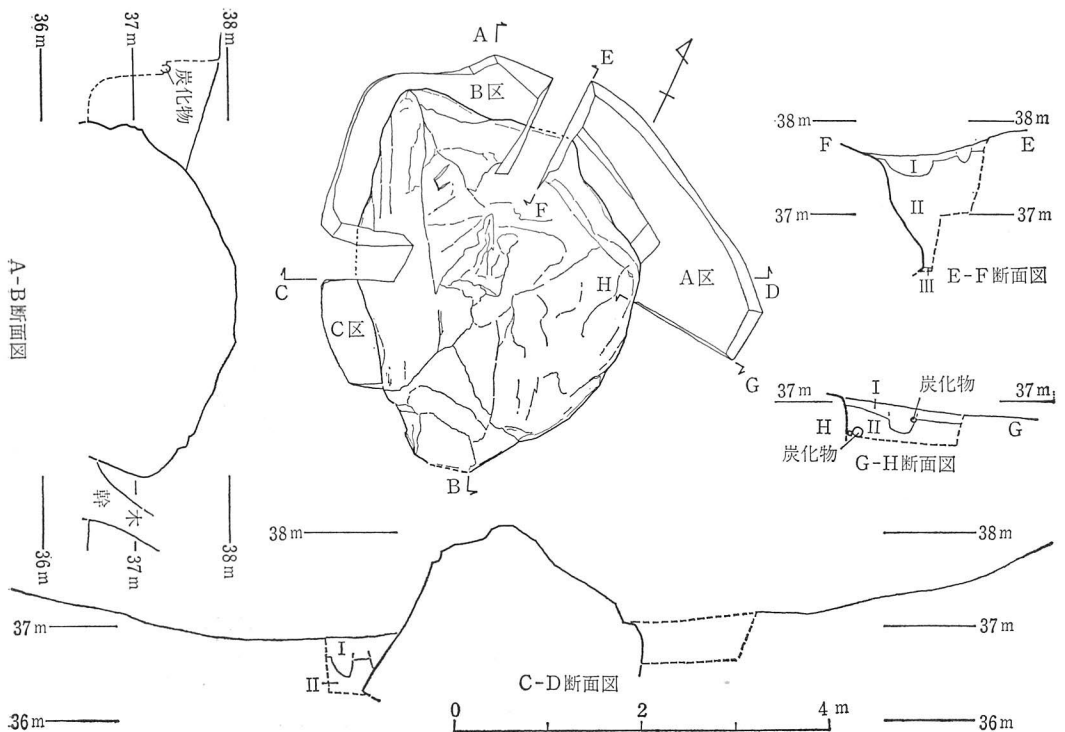
調査はまず、この石の正確な形状を把握するために、周囲の部分

を〇・五〜一・二メートルにわたって掘り下げ、輪郭を追及した。その結果、この石は長軸の長さ四・一メートル、直行する部分の最大幅は三メートルの、名の由来の一つである亀甲状に近い平面形を示すことが理解された（図版六3、第11図）。石の厚みはもっとも

厚みを有する部分で、一・八メートル以上を計ることができた。この石の地上に露呈している部分は、苔がむしっている関係もあり、暗緑色を示していたが、地表下に埋没している箇所は、淡い鼠色を呈していた。剥片の鑑定結果は、後述のように花崗閃緑岩であった。

石の表面には、南西部の傾斜面に一・八メートル×一・二メートルの卵円状の平坦面が認められるものの、他の部分は起伏の多い面をなしている。頂部付近には、タガネによる加工の痕跡（「矢穴」）が数箇所にわたって認められ、表面の起伏の多さと関連するかとも思われた。下面の埋没している部分に、より大きな平坦面が残されている可能性も考慮しておく必要がある。

石が覆土のために輪郭が見えない北半分の周囲を掘り下げた。ここに二本の土層観察用の土堤をはさんで、東からA区、B区、C区として、発掘を行った。もっとも深く掘り下げたA区の西壁で、土層を観察してみると、一〇〜二〇センチの黒色腐食土（I層）の下



第11図 大塚陵墓参考地の「ごぼ石」の平面および断面（1/80）

位に約一・一メートルの礫混じりの黄褐色の粘質土が認められ(Ⅱ層)、掘削の床面近くが礫の含有量の増えたいわゆるジャッケツ層的な様相を示す層(Ⅲ層)であった。

このうち、Ⅰ層は木根による攪乱のため、地表下三〇センチに及ぶところもあった。Ⅱ層には、炭化した松がその樹皮とともに集積された部分が見出された箇所もあり、とくにA区では著しかった。また、ごぼ石近辺での粘質土は、粘り気の少なく柔らかい状況を示していた。本層では、後述するような瓦や陶磁器の破片が数多く検出された。これらの遺物は、この地層の上下から満遍なく検出されており、特定のレベルや地点に偏在するようなことはなかった。判明するかぎりにおいては江戸時代以後のものが多く、注目されるのである。石の周囲には、小石の集積、さらには大石の存在等は認められず、堅く締まった粘土層の存在も確認できなかった。掘削範囲外の部分―石の南側におけるボーリング棒による探査によっても、大石の存在等を示すような感触は得られなかった。

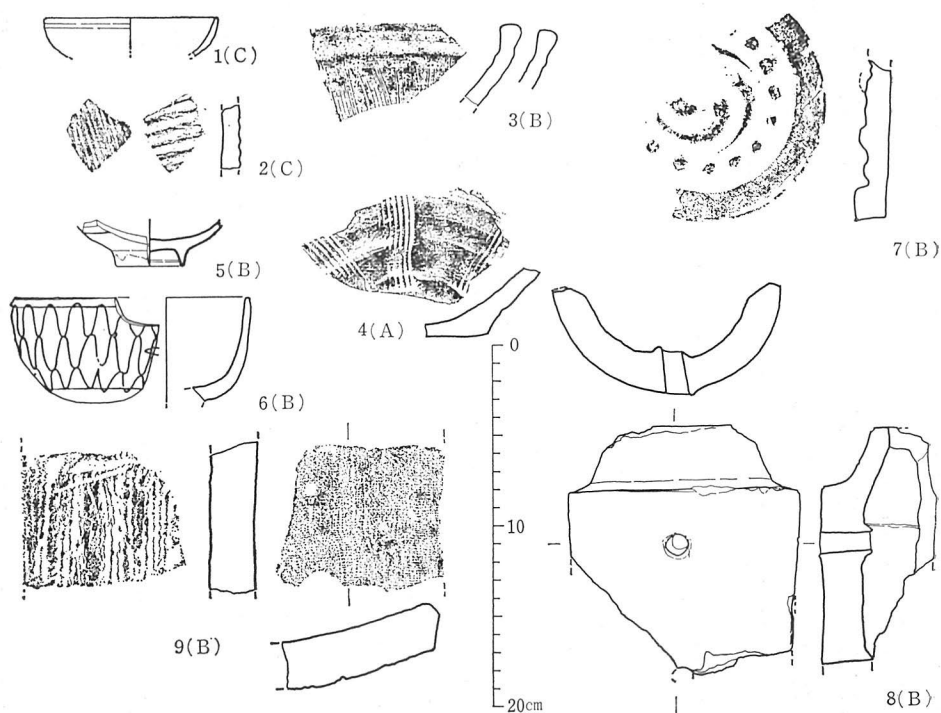
この石については、一部に横穴式石室の石材―とりわけ、天井石とみなす見解があることはよく知られていることである。今回の場合、掘削範囲が限られること、地山を確定できないことなどの制約があり、ごぼ石に掘り方があるかどうか等、確定できない弱みがあるのは残念なことである。しかし、いずれにしても、該所に横穴式石室の存在を認めることは、前述したような状況などからみて難しいといえよう。石材として

横穴式石室に使用されていたものが、移動の結果として該所に位置することとなったのか、逆に横穴式石室の石材として使用すべく、該所に運んだが、何らかの理由で断念されたか、ということも想定される。ところが、石の南西部に見られる平坦面は当初の状態を保持していない可能性が大いにあるとしても、また、下面の状態が判明しないもどかしさはあるものの、石の大きさに比して、やや狭小の感が生ずることを禁じえないのである。本石の存在するくぼ地の部分は、当地が陵墓参考地として治定される大正十四年以前も墳頂部と並んで官有地であったことが知られている。また、該所には石の南面付近に祠の存在が伝えられており、石そのものが神聖視され、信仰の対象となっていたのである。この信仰が何時までさかのぼるか、明らかにしないが、今回石の周囲で検出された皿等の遺物は、その信仰との関連で理解し、さらにはその上限の一端を示すと考えてよいように思われる。

いずれにしても、今回の調査では、後円部南斜面に所在の巨石が、横穴式石室関連のものと断言しうるだけの資料は得られなかった。また、遺物の上からも古墳時代に関連付けられるものは、認められなかった。出土品は、すべてがごぼ石周囲の掘削坑から検出されたもので、三五点を数える。瓦類がその多くを占め、土師器・土師質土器、陶磁器がこれに次ぐ。

土師質土器(第12図1・2)

七点出土している。1は、口径九センチ前後に復元できる皿で、体部



第12図 大塚陵墓参考地の出土品 (1/4)

から口縁部にかけて緩やかなカーブを描く。内外面とも摩耗が著しい。2の甕は、外面を粗い叩きで調整したもので、内面には右下がりの刷毛目が認められる。明橙褐色を呈する硬質の製品。この他、外面に細かい刷毛目を伴う板状の製品等が出土している。

妬器 (3・4)

三点出土しているが、いずれも摺鉢である。3は、丸く肥厚させた口縁部を有するもので、注口部分をとどめている。体部には六本単位の卸目がやや間隔を空けて刻されている。茶褐色を呈する丹波の製品。4は、七本単位の卸目を間隔を空けて配したものであるが、使用のためにかなり摩耗している。やや黄味がかった淡灰褐色を呈す。信楽産か。他の一片も後者と同一製品と思われる。

磁器 (5・6)

肥前産の碗が三点出土している。5は染付で、高台量付付近から内面にかけては無釉であるが、内面には一部円形状に灰釉が付着している。6も染付碗で、口径約九センチに復元できる。一重の網目文を主文とする。釉調にむらがあり、体部下半では露胎となっている箇所もある。

瓦 (7・9)

軒丸瓦、丸瓦、平瓦が二〇点ほど出土した。明らかに棧瓦と知れるものは認められない。二点を除き、黒く燻した、いわゆる燻瓦である。

軒丸瓦(7) 瓦当面の径が一三センチ前後に復元されるもので、三ツ巴文からなる。巴は右巴で、まわりに珠文を配する構成である。一部に丸瓦部との接合部をとどめている。黒く燻した製品。

丸瓦(8) 七点出土し、一点の須恵質の焼成を示すものの他は、燻瓦である。8も燻瓦で、玉縁を有する製品。目釘穴が二カ所にわたって認められる。凹面の一部に布目をとどめている。

平瓦(9) 一二点出土。うち、一点が須恵質の焼成を示す厚手の製品(9)で、凹面に布目庄痕、凸面に縄目叩きが行われている。近隣に該当する時期の寺院・官衙跡等は認められず、注目される。他の一一点は燻瓦であるが、なかには厚さ一センチ前後の薄手の製品がある。

以上、出土品には平瓦(9)のごとく、古代にまで遡ると思われるもの、摺鉢(4)のように中世末前後のものも認められるが、磁器碗(5・6)や摺鉢(3)のように一七世紀中葉から一八世紀初頭前後のものが多くようである。

(福尾正彦)

註

(1) 梅原末治「大塚山古墳後圓部所在の大石」『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告』第五輯 大阪府 一九三四年 に大塚陵墓参考地の写真が載せられている。

奈良、推古天皇陵、河内大塚陵墓参考地の報告は、現地調査をともにした笠野 毅の全面的な協力を得て、まとめたものである。また、報告をなすにあたって、白石太郎、春成秀爾、東 潮、中井一夫、土生田純之、岩永省三、扇浦正義、奈良県立橿原考古学研究所の各氏、機関には関連資料の実見をはじめ、色

色と御教示を賜った。記して感謝申し上げる次第である。

河内大塚陵墓参考地所在ごぼ石、大市墓および奈良田陵採集「葺石」の岩石学的記載

加藤 昭(国立科学博物館地学研究部)

序

大阪府羽曳野市大塚陵墓参考地ごぼ石、奈良県桜井市大市墓および同県天理市奈良田陵採集「葺石」試料それぞれ一・二四・一七個計四二個の試料のうち代表的な二五試料について肉眼観察、六試料について顕微鏡観察を行なった。これらのうち既存の記載を参考にして原産地を推定した結果、七試料については、少なくとも同質の岩石が露出している場所を限定することができた。これらについて報告する。

I、検討対象岩石試料

対象となった岩石試料は次のとおりである。(番号…個数)

河内大塚陵墓参考地出土ごぼ石(A…1)

大市墓(A…9、B…2、C…2、D…1、E…3、F…1、G…1、

H…5)

奈良田陵(I…2、J…2、K…2、L…1、M…3、N…2、O…1、

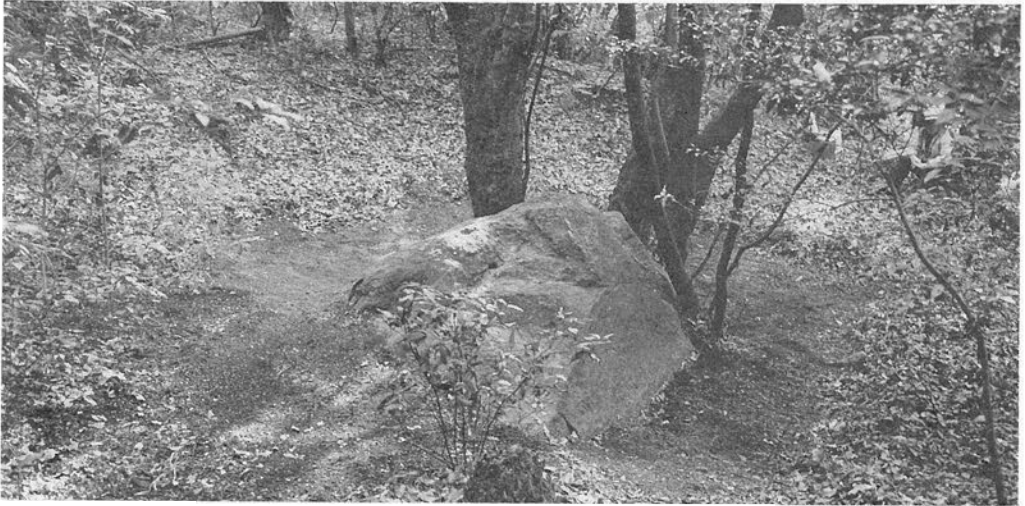
P…2)

II、岩石記載

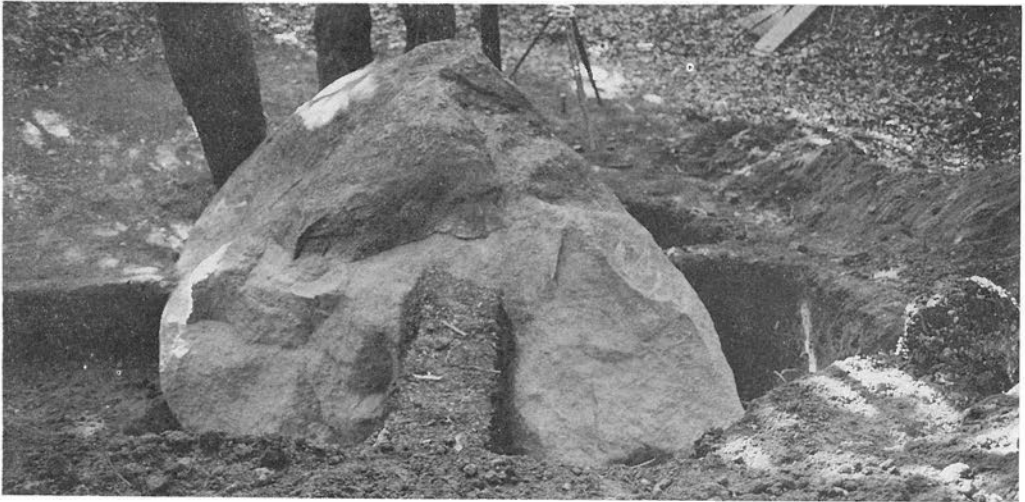
まず岩石名を挙げ、確認された鉱物名を多さの順に掲げた。顕微鏡観察を行ったものについては、その結果を簡単に記述し、薄片の写真(単



1. 推古天皇陵の大形石材（南から）



2. 大塚陵墓参考地のごぼ石(1)（北西から）



3. 大塚陵墓参考地のごぼ石(2)（北から）